
女性のライフプランニングを志向した授業実践
—共通教育科目「女性とキャリア」の開発と評価—
Developing a Syllabus Focusing on Women's Life Planning
: Its Practice and Evaluation in the Career Education

長田 尚子・藪田 由己子
Naoko Osada・Yukiko Yabuta

This study describes the process of development and evaluation of a class called "Women and Career" in the women's junior college in Nagano. The class was offered in 2011 and 2013, and 121 and 45 students participated respectively. Life planning was a main concept for syllabus design since we see the word "career" as a person's progress through a phase of life, not merely an occupation or profession. Three activities were used to help students design their career: role model research, financial planning, and completing a career development sheet. From the analysis of students' comments and questionnaires, these activities are all found to be effective for their life planning. Through role model research, the students found the importance of having courage to take action, maintaining a life vision, and support team members. Their views on "career" have changed greatly during the course. Before the class started, not so many students had positive images about women's career, however, they could see their career more positively and diversely after the course. From the analysis of final reports, diversity of work style, possibility of women's ability, and importance of planning were top the three aspects the students thought to be important in their career. This implied that this course syllabus played a positive role for fostering the mind set for career designing.

キーワード : life planning (ライフプランニング), role model (ロールモデル),
career development (キャリア形成)

1. はじめに

高等教育の現場でキャリアという言葉が聞かれるようになって久しい。長野県長野市に位置する清泉女学院短期大学（清泉女学院大学併設、以下、本学）においても、広い意味でのキャリア支援を志向すべきとの方針のもと、2009年度にキャリア支援センターが設立された。その後、厳しい景気動向や雇用情勢が続く中、従来型の就職支援に注力する状

況に大きな変化はない。このような環境において本学では、地域の中核的な女子高等教育機関として就職実績をあげてきたが、引き続き不透明な雇用情勢、若者の早期離職問題や勤労観・職業観の希薄化等を踏まえ、人生の中で働くことを捉えるアプローチの必要性が認識されるようになった。本論文では、その課題への取り組みのひとつとして、2011年度に開講した共通教育科目「女性とキャリア」の授業実践の特徴と実践の成果をまとめ、ロールモデル研究を経てライフプランニングに取り組む授業実践の意義について考察する。

2. 実践の背景

少子高齢化が進行する中、女性による安定的な就労を支援していくことが、政策上の課題となっている。遡ってみると、1986年に施行された「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」、いわゆる男女雇用機会均等法以降、男女共同参画の様々な文脈において法整備や環境整備が行われてきた。一方、このような外的環境の整備は、「社会的に自立的に生きていく力や態度」を発達させ行動化するのには、女性自身の責任であることを暗に要請していると捉える必要性も指摘されている〔渡辺 2009：16-17〕。すなわち、女性が自分の人生の中に、働くことと結婚・出産などをどのように組み込んでいくのかについて、選択の機会や幅が増えた反面、選択に際して自立的に考え、キャリアを形成していく力を持ち合わせる必要性も増したのである。職業を持って、社会で働くことは選抜された女性のみにも求められることなく、すべての女性の生涯にわたる課題であり、多様な女性のエンパワーメントを目指して、適切なキャリア形成支援が必要になっている〔日本女性学習財団 2011：8-10〕。

このような背景において本学では、2011年度から「女性とキャリア」という共通教育科目を隔年開講科目として開講することが決定した。「女性とキャリア」の開講前に、「女性とライフコース」という科目が存在していたが、担当者の退職等により2009年度以降閉講となっていた。「女性とキャリア」の開発は、「女性とライフコース」で大切にしていた女性の生涯をたどる授業展開を引継ぎ、卒業生が直面するであろうライフイベントを取り上げ、その時々でどう考え、どのような選択をしようのかを考察することを基本とした。

ライフコースとは、生まれてから死ぬまでにたどる道筋であると考えられることができるが、女性の場合、就職、結婚、夫の転勤、出産と多様なライフイベントに遭遇する。その時々でどのような選択をしたのかがライフコースを形作る。「女性とキャリア」の開発に際しては、人生の選択に際しての先輩の生き方や考え方を参考にするという観点から、近年調査研究が進んでいるロールモデルを用いた学習活動を取り入れることにした〔羽田野 2007：109-110〕。地方においても核家族化が進んでいるが、それとともに、卒業生の就職先が比較的小規模な事業所であることも想定され⁽¹⁾、身近にロールモデルが随時存在しないことが危惧される。そこで、多様なメディアからロールモデルを探し、そのモデ

ルから主体的に学びとる力の養成が必要ではないかと考えた。

それに加え、ライフプランニングの考え方を取り入れることも重視した。内閣府男女共同参画局による「女性のライフプランニング支援に関する調査報告書」では、仕事と家庭生活の両立のために様々な支援が必要であることは言うまでもないが、そうした従来の両立支援にとどまらず、長期的な視点に立って女性が自分のライフコース選択を行うための「ライフプランニング」のための支援も必要であることが指摘されている〔内閣府男女共同参画局 2007：280-282〕。あわせて同報告書では、状況が変化する際に適宜プランを見直す姿勢、ロールモデルの生き方を参考にすること、同じ悩みを持つ人同士の悩みの共有の機会等が重要であることが指摘されている。

以上のことから「女性とキャリア」の開発にあたっては、20歳代から50歳代までの範囲で想定できるライフイベントを盛り込んだ講義、ロールモデル研究とそれを踏まえたグループディスカッション、金融教育、キャリアディベロップメントシートを用いたライフプランニングを、中心的な学習活動として授業を展開することとした。開発および講義は、各ライフイベントの経験者でもある本論文の著者らが担当することとなった。

(表-1) 「女性とキャリア」15回の流れ

	授業テーマ	取り上げた話題やキーワード	主な活動
1	オリエンテーション 担当教員のキャリア紹介	最近の政策、社会情勢、キャリア、 ロールモデル	役割円グラフ
2	結婚と仕事	ワークライフバランス、男女共同参 画、ジェンダー、プラントハプンスタ ンス理論、夫婦別姓	ロールモデル 研究
3	出産と仕事	ロールモデル、ライフイベント、労働 基準法、男女雇用機会均等法、育児・ 介護休業法	ロールモデル 研究
4	子どもを預ける	労働力人口、M字カーブ、待機児童、 無認可保育所・企業内保育所、在宅勤 務	ロールモデル 研究 (自由)
5	子どもからみた働く母親、 母親のコミュニティ	非正規雇用、契約社員・派遣社員、 PTA・学童保育、パパクオーター制、 男性の育児休職、復職	ロールモデル 研究
6	親の介護、自らの不調	キャリア理論 (スーパー、シャイン 他)、ダイバーシティ、女性と成果主 義、介護休職	ロールモデル 研究 (自由)
7	長野の女性と自己実現	—	講演会
8	短大卒業からのキャリア	ウーマノミクス、キャリア形成、キャ リアラダー、メンター	ロールモデル 研究
9	異業種からの転職	退職、転職、職務経歴書、学歴、資 格、フォーマルネットワーク、イン フォーマルネットワーク	ロールモデル 研究

10	海外経験を活かす	正規留学、ワーキングホリデー、語学留学、青年海外協力隊	ロールモデル研究（自由）
11	女性の上司と働く	人事評価システム、コンピテンシー、スキル、360度評価、インセンティブ、価値観	ロールモデル研究、価値分析
12	女性管理職への道	ガラスの天井、スペシャリスト制度、裁量労働制、起業	ロールモデル研究（自由）
13	ライフプランニング	金融教育、ライフイベント	ライフサイクルゲーム
14	自己の確立と家族の幸せ	自律的キャリア、少子化対策、政府の政策、海外の状況	キャリアデイベロップメントシート作成
15	最終レポートとまとめ	－	－

3. 授業の概要と主な学習活動

(1) 全体の流れ

「女性とキャリア」は本学の共通教育科目の中の「現代教養科目」として位置づけられている。本学には、幼児教育科と国際コミュニケーション科の2科があるが、共通教育科目はどちらの科の学生も受講可能である。授業は隔年で秋学期に開講しており、学生は2011年121人、2013年45人であった⁽²⁾。

授業は全15回であり、前半はライフイベントを意識して結婚、出産、育児、介護という家族の問題と仕事について、後半はキャリアアップや海外経験の活かし方など、生涯学習者としての女性の姿を扱った。具体的な内容は、表-1のとおりである。講義では、ロールモデル研究を中心に、毎回のテーマに沿った話題やキーワードを取り上げた。第7回目の授業では、地元で活躍する女性をロールモデルとして招いた講演会を行った。また第13回目の授業ではライフプランニングにおける金融教育として生命保険会社による授業を行った。その後各自のライフプランニングの集大成としてキャリアデイベロップメントシートの記入を行った。その詳細については後に述べる。

毎回の授業の流れは以下のとおりである。学生には、その回に取り上げるロールモデルについて事前に検討し、A4用紙1枚のレポートをまとめてくることが課せられた。授業開始から20分程度は、持ち寄ったレポートをもとにグループディスカッションを行った。グループは4人1組であり、学科・学年を混ぜた構成になるよう配慮し、ディスカッションを通じて一定の問題意識を醸成した上で、その回のテーマに沿った講義を行った。クラスルールとして、他者の生き方や考え方を尊重するよう初回に提示した。

(2) 主な学習活動

1) ロールモデル研究

この授業の柱の一つとして、ロールモデルからの学びがある。2011年度は『私の仕事道-トップ女性10人のジグザグキャリアから学ぶ』（福沢・日本能率協会マネジメント

センター) から、毎回1人を取り上げて研究した。2013年度は、多様な環境で活躍している女性を幅広くロールモデルにするために、国立女性教育会館が提供している「女性のキャリア形成支援サイト」も利用した。このサイトには、キャリアアップ、就職・再就職、企業・経営、NPO・ボランティア、農業・自然環境、地域づくり・政治参画、国際的な活躍、研究者・技術者の8つの分野があり、それぞれの分野でロールモデルの事例紹介を見ることができる。事例紹介にはプロフィールに加え、仕事内容やキャリア形成の経緯等が語られたインタビューが掲載されている。学生は指定されたロールモデル、また、指定がない回には自分の興味があるロールモデルをサイトから自由に選んで⁽³⁾ レポートを作成した。この学習活動により、グループディスカッションを通じて多様な選択や考えの存在への気づき、自らロールモデルを選定し学びを得る姿勢を身に付けることを目指した。

2) ブックレポート

ロールモデル研究に加え、ブックレポートを課題とした。ブックレポートは本学のすべての共通教育科目で実施している共通課題である。「女性とキャリア」では、女性の生き方を考えるために役に立つと思う本を1冊選び、友人にその本を紹介することを目的として、A4用紙1枚にまとめて提出するという課題を設定した。授業開始当初に告知し、第7回目に中間発表、第13回目にグループに発表後提出とした。ブックレポートでは、講義内容に限らず、女性の生き方に関するもの、心に響いたことば、子育てや海外での経験を語ったものなど、色々なテーマを見ることができ、読んできたものを分かち合うことにより、他のメンバーからの学びがあると考えられる。

3) 価値観分析ワーク

第10回目に、価値観分析ワークを行った⁽⁴⁾。これは、与えられた言葉を使って、20年後、自分がどのような生き方・働き方をしたいと思うかを考えてみようというワークである。学生には、自由、自律、平和、達成感、仲間、人間関係など50の言葉が並んでいるシートが配られる。それぞれの言葉が書かれたカードをはさみで切り離し、50枚の中から、20枚を選び、さらにその中から10枚を選び、最終的には5枚のカードを選ぶ。最後にその5枚のカードに書かれた言葉を使って20年後の自分の姿を文章で表現する。文章執筆後の振り返りでは、全てを手に入れることはできないこと、人生には取捨選択が必要であること、しかしその中でも大切にしたいことは何かに気づき、その後のライフプランニングに活かすことが肝要であることを伝えた。

4) ライフプランニングへの金融教育の導入

各自のライフプランを考える前に、人生にどのようなライフイベントがあり、それにはどのくらい費用がかかり、そのためにはどのような備えが必要なのか疑似体験できる授業を取り入れた。この後、学生はロールモデル研究の総合的考察に基づいてキャリアディベロップメントシートをまとめる。この活動は、その内容をより具体的に考察できるようになることを目的としている。2011年度はソニー生命の「ライフプランニング授業」⁽⁵⁾

を、2013年度は第一生命保険の「ライフサイクルゲームⅡ」⁽⁶⁾を行った。

2011年度に実施したライフプランニング授業では、まずグループで仮想の家族を設定し、子供の進学、住宅購入、家庭の収入、家族の夢などを一つずつ設計する。その後ファイナンシャルプランナーの講師が学生のプラン通りにシミュレーションして年度別収支と金融資産残高とのバランスを算出すると、大幅な赤字になるグループが続出する。そこで、本当に必要なものは何なのか、また実現させるためにはどうやって収入を増やせばいいのかなどを、講師と一緒に考えた。この場面において、女性の労働力が家庭の経済にいかに関与を及ぼすかを強く感じた学生が多く、金融教育は本学の「女性とキャリア」という授業に必須の単元であることが認識された。2013年度に実施したライフサイクルゲームⅡは、すごろく形式の消費者教育教材で、ライフイベントを実感するとともに、近年急増している消費者トラブルへの対応も盛り込まれている。ゲーム終了後にはライフイベント表に結婚、出産、住宅購入などのイベントを記入し、必要経費を計算した。

どちらの授業でも実際の金額が提示されることで現実味が増し、疑似体験とはいえ女性の生涯を見渡す効果的な機会となる。勤労観・職業観の希薄化で、キャリア形成の方向性が見出せず、働く意義を感じられない学生も少なくないが、金融教育を通じて、自ら夢をもってキャリアを築いていくこと、経済的に自立すること、家庭を支えるために働くことはどれも必要なことだということを実感する学生も多かった。

5) キャリアディベロップメントシートによるライフプランニング

授業の集大成として、学生は総合的なライフプランニングに取り組み、20代から50代までの自分のキャリアをデザインし、キャリアディベロップメントシートを作成した。このシートでは自分の生涯を20代前半、後半というように、それぞれの年代を5年ずつに分け、①仕事、働き方、②プライベート、③次のステップに向けてすることの3つについて考え、記入できるようになっている。学生はロールモデル研究を通して働き方のイメージを、ライフイベントを意識した講義や、金融教育の観点からのライフプランニング等を通して、結婚、出産、子供の教育などライフイベントのイメージをある程度形成できていることが期待できる。講義を通して女性が働き続けるための様々な制度も学んだ上で、実際に自分の人生をデザインし記入できれば、この授業の大きな目的を達したと考えることができる。なお、2011年度は金融教育を使ったライフプランニング授業の前にシートの記入を行ったが、2013年度は金融教育としてのライフサイクルゲームⅡの実施後にシートの記入を行えるよう授業配置を工夫した。

(3) 評価方法

評価は、①毎回のロールモデルのレポート提出、②グループディスカッションへの参加態度、③ブックレポートの内容、④最終レポートの内容とした。①、③、④の評価については、レポートの課題に対しての考察をA（非常によい）、B（及第点）C（努力を要する）の3段階で評価した。②に関して、授業担当者の観察により評価した。

4. 実践の成果

ここでは、以上に示した授業の構成と特徴を踏まえ、完成年度として位置付けた2013年度の実践を中心に、当科目の成果と今後の課題をまとめる。15回の授業の範囲で学生に具体的な成長を求めることは難しいが、授業の中で学生が何を考え、どのようなアウトプットを残したのかについてまとめることにより、その先に必要となるアプローチが見えてくると考えられる。そこでまず授業評価アンケートの結果から実践の概要を把握し、最終レポートの内容、ロールモデル研究を通じた学生の学び、ライフプランニングへの取り組み状況、授業を通じた考え方の変化の順に考察を進める。

(1) 概要

本学では学生に対して、授業評価アンケートを実施している。シラバスの提示、授業実施、アンケートの実施、教員による自己点検評価に至るプロセスについて、学生も説明を受けて参加しているため、授業実施の経過を考察する基本データとして用いることができると考えられる。授業評価アンケートは全学共通の基本10項目と各授業で追加できる5項目からなり、それぞれについて「強くそう思う」を5点、「まったくそう思わない」を1点とした5段階評価となっている。

授業評価アンケートの基本10項目は、学生自身の受講態度の評価、授業者や授業環境に対する評価、総合的な満足度の評価からなり、最後の項目10の「この授業全体を振り返り、満足できる内容であったと思いますか」という設問により、授業の全体的な満足度を一定程度把握できる。2013年度に実施した当授業の項目10の平均点は4.73となっており、同学期の全共通教育科目の項目10の平均点4.44を上回っていることから、受講した学生がある程度の満足を示していた様子がうかがえる。

また、受講した学生のプロフィールや人数が異なるため直接の比較は難しいが、2011年度実施分の項目10の平均値は4.59であったが、2013年度は前述のとおり4.73となっている。2011年度から2013年度に向けては、女性のためのキャリア形成支援サイトを用いて多様なロールモデルを扱ったこと、自らロールモデルを選ぶ回を設定したこと、単元の順番を工夫しキャリアディベロップメントシートによる自らのライフプランニングを集大成として位置付けたことの3つの授業改善を行っている。この2013年度に向けての改善は、基本的にはよい方向であったものと考えられる。

2013年度は追加5項目を設定して、主な学習活動について、自分のキャリアを考えるために役立ったかどうかを問うている。結果は「担当者による講義」4.70、「ロールモデル研究」4.58、「グループディスカッション」4.35、「ブックレポート」4.26、「生命保険会社による授業」4.49となった。以上示した数値から、学生は女性のキャリアプランニングを支援する目的で開発してきた「女性とキャリア」という授業に一定程度満足し、自らのキャリアプランニングのために、各回の講義やロールモデル研究を役立てていたことがわかる。そこで次に、各回の講義やロールモデルによる学習がどのように捉えられていたのかについて検討する。

(2) 最終レポートに取り上げられたキーワード

授業の最終回に各自の講義ノートやレポートを参照できる教室環境で最終レポート課題を実施した。その最初の設問として、これから働いていく上で大切だと思う事を、授業の中で出てきた用語を3つ使ってまとめるという課題を提示した。各自が取り上げた用語の数を集計し、学生の10%以上が記載した用語を多い順に示すと、「ワークライフバランス」22、「メンター」20、「ブランドハプスタンス理論」19、「インフォーマルネットワーク」11、「フォーマルネットワーク」10、「ロールモデル」10、「ライフイベント」7となった。学生が取り上げた用語から、ワークライフバランスを図りつつ、メンターの助言、仕事上の仲間や友人とのコミュニケーション、ロールモデルの生き方からの学びを大切に、積極的な姿勢で働いていくことを目指す姿勢での記述が多かったことがわかる。

(3) ロールモデルからの学び

最終レポートの中では、この授業で取り上げたロールモデルの中で、特に印象に残っているモデルを挙げ、自らの人生を考えるにあたり、どのような気づきがあったのかも問うている。延べ44人のロールモデルが挙げられたが、学生の10%以上が取り上げたロールモデルは表-2のとおりとなる。

表-2に示したように、11名が挙げたASさんと8名が挙げたTMさんは、いずれも短大出身という経歴から自らの視点を活かし、女性として、子育て経験者としてその後も活躍している。また、表-2の中には記載していないが、9名の学生が各自で自由に選択したロールモデルを取り上げていた。取り上げられたモデルの職業は、研究者、平和教育、弁護士、ダンサーなどバラエティーに富み、まさに多様な生き方に各自が共感を覚えた様子がわかる。

(表-2) 多くの学生が取り上げたロールモデル

ロールモデルのプロフィール概要	人数
ASさん：短大卒業後入社した会社で女性の視点を活かした商品を開発・研究	11
TMさん：短大卒業後入社した保険会社で事務から営業、子育ても経験し現在管理職	8
YKさん：ファッション業界でマーケティングの経験を積み出産後もキャリアアップ	6
KOさん：保育士として働いた後結婚・出産、その後地域の子育て支援のNPO設立	6

教員が提示したモデルだけでなく、自ら選んだモデルを9名の学生が取り上げていたことは、自立的にロールモデルを探し、そこから自分なりの学びを得るという当初の目的が達成できていたことを示している。

ロールモデルから何を学び取ったかを把握するために、学生が記述した内容から、ロールモデルからの学びについての記述がある部分を文章ごとに抽出し、佐藤(2008)を参考にカテゴリーを作成して分類・集計した。分類・集計にあたっては、第一著者が原案を

作成した段階で第二著者と協議し、協議結果を反映して第一著者が再度分類・集計を行うという方法をとった。抽出された文章は合計 123 文となり、ロールモデルから学んだことの内訳は生成されたカテゴリーに分類された文章数の多い順に、「行動に移す」17、「夢を捨てない」9、「周囲を支える」5、「環境に働きかける」4、「両立するすばらしさ」3、「信頼関係の大切さ」3となった。上位に挙げたカテゴリーは、就職活動開始を控えた学生ならではの気づきだといえる。

今回のロールモデル研究によって、資料やサイトに提示されたモデルからも学ぶ力、必要なヒントを与えてくれるぴったりモデルに出会えなくても、自らの状況に合わせて学びのポイントを探す力を付けることができるものと考えられる。2013年度の授業の中盤に、それまでのロールモデル研究の感想をグループで話し合う機会を設けた。その時点ではロールモデルの生き方が自分たちとあまりにもかけ離れているように感じ、ロールモデルの生き方は役に立たないのではないかという議論が行われたグループが全 13 グループ中 3 グループあった。前述の授業評価アンケートの追加項目で、ロールモデル研究の有効性が数値の上でも示されたように、学生たちは授業の最後に向けて学習を続けることで、ロールモデルからの学び方を考察できよう。

(4) ライフプランニングと就業

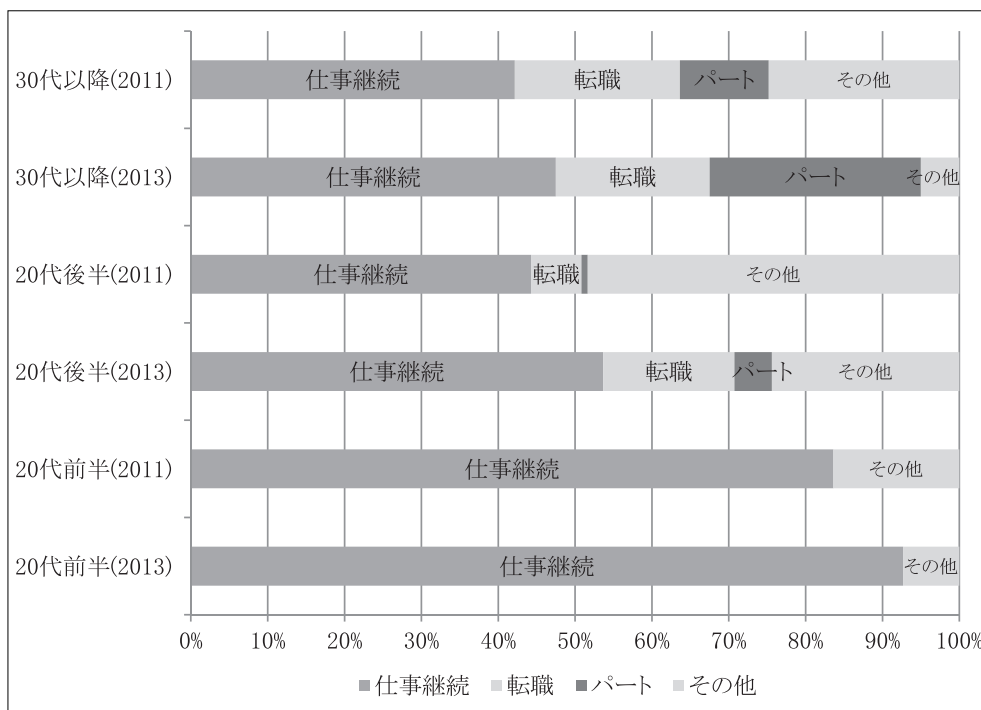
学生各自が取り組んだライフプランニングの集大成として、キャリアディベロップメントシートがまとめられた。記入例として講義を担当した 2 名のここまでのキャリアとそれぞれの時点での考え方をあらかじめ記入してある。記入にあたっては、それらを参考に、授業で扱ったロールモデルの事例を一度記入してみたのち、自分のものを記入するという流れで行った。

この記入を通じて学生たちは、何歳で就職、何歳で結婚というようにライフイベントを考えるだけでなく、次の年代までにこうなりたい、そのためにはこういった準備をしてみたいという、自立的に自らのキャリアを考える機会を得た。仕事だけでなく、プライベートではスポーツや趣味、旅行や家族のイベント、自己啓発活動などの記述がみられたことは、仕事だけではなく、生き方そのものとしてキャリアを捉えるという本科目の目標に近づくことができたと考ええる。学生が記述したライフプランの各年代で、どの程度の就業を考えているのかについて、キャリアディベロップメントシートから抜粋し、年代ごと、授業実施年度ごとにまとめたものが図-1である。

図-1 から、20代前半では 80% 以上の学生が当初就職した企業でそのまま仕事を継続するつもりであることがわかるが、20代後半以降では、仕事継続の意向を示した学生は 40% 程度となっている。逆に 20代後半から転職、30代以降ではパートという意向を示す学生の割合が増えてきている。また、2011年度の学生よりも 2013年度の学生の方が、当初の仕事を継続する意向を示す学生の割合が若干多い。受講学生のプロフィール等に影響される可能性はあるが、2013年度は、金融教育を用いたライフプランの直後にキャリアディベロップメントシートの記入を行うという進行であったため、より安定的な就業を

重視する姿勢が表れたと考えることもできよう。仕事継続を予想する学生と中断を予想する学生の違いは何か、現時点での考え方が今後どう変化していくのかについては、キャリア形成支援の観点からも継続的にデータを収集し考察を深めていく必要がある。

(図-1) 年代ごとの就業プランの比較



(5) 考え方の変化

最終レポートの最後の設問を、授業に参加する中での気づきをまとめ、授業開始前と今とで考え方が変わったところがある場合、その点をまとめるという内容とした。ここでは、各学生が記述した授業前の考え方と、授業後の考え方を前述(3)に示した方法で抽出し、カテゴリーに分類・集計した結果を表-3に示す。文章の抽出は文面から授業前に持っていた考え方であること、授業後に持った考え方であることが判断できる文章のみを対象とした。抽出された文章数の合計は、授業前が28文章、授業後が45文章である。なお、明確な記述がない者、一人で複数の文章を記述した者もいた。表-3には各カテゴリーに分類された文章数が多いものから授業前・授業後それぞれ3カテゴリーにつき、文章例とともにまとめた。

表-3の上半分からわかるように、授業前の学生の考え方は限定的かつ固定的なものであり、母親の働き方や自分が見聞きして知っている範囲の情報から女性のキャリアを捉えがちであったことがわかる。一方下半分に示した授業後の考え方は、個性的で柔軟な女性の働き方や生き方を知り、女性の可能性について気づきを持てたことがわかる。表中には紙幅の関係で示していないが、「自分が女性でよかった」という意見も複数記述があった。複数のロールモデルから学び、ライフプランニングに挑戦する活動を通じ、プランを

持つことでより柔軟で多様な生き方ができる可能性があることを学生各自が考察できたようだ。

(表-3) 授業を通じた考え方の変化

授業前の考え方 (抽出文章数合計: 28)	
「キャリアについて限定的・固定的な考え」 ・母のように家庭を築き、一般事務職でずっと働けばいいかなと考えていました。 ・とにかく「就職する」ということしか頭になかった。	8
「女性の限界」 ・女性が社会で活躍する場は少ないのではないかと思っていた。 ・女性はあまりいい評価をされていないのだろうと思っていました。	6
「キャリア形成について考えた経験なし」 ・自分のキャリア形成について考えていくと言われてもピンときていなかった。 ・社会に出て働くことに興味がありませんでした。	5
授業後の考え方 (抽出文章数合計: 45)	
「多様な働き方生き方」 ・女性の生き方には様々な形があって、みんなそれぞれ個性的に生きているのだという当たり前のことを実感しました。 ・案外、働くということがそこまでがちがちに固いものではないのだと感じました。	19
「女性の可能性」 ・家庭ができたならそこで仕事をあきらめるのではなく、両立して頑張りたいと思うようになりました。 ・働いている女性が仕事を楽しく生き生きとこなしていて、30・40代になってもキャリアを積み重ねている姿にかっこいいなと思った。	8
「プランを持つことの大切さ」 ・自分が働いたときどうすればいいのかを具体的に想像できるようになった。 ・自分はどのようなスタイルで働きたいか、どのようなスタイルで働けるかを考えるようになった。	7

5. まとめと今後の課題

今回の取組みでは、キャリアを職業選択のみに留まらない「生き方」ととらえ、それをどのようにプランしていったらいいのかを考えることに焦点を当て、各自のキャリアディベロップメントシートを作成することを最終的な成果物とした。ライフプランニングをするにあたり、まだ社会経験の少ない学生にはロールモデル研究が有効であるということがわかった。自分のやりたいことがわからない学生はロールモデルをお手本とし、すでにやりたいことがわかっている学生もロールモデルから別の視点を得ていた。ロールモデルの紹介は仕事のことのみならず、家庭やプライベートについても述べており、ワークライフバランスを考える上でロールモデルの生き方を参考にしていた学生が多かった。

また、ライフプランに取り組むために、事前に実施した金融教育も有効であったと考える。キャリアをデザインしていく上で、個人の夢や理想の家庭像等を思い描くわけであるが、それには実際にどれだけの支出を必要とし、自分の働き方がどれだけの収入を生むか

という現実を見ることは、別の面から働く意義を学生に与えたと思われる。今後もこの2つの活動を授業の中心的活動として続けていくとともに、さらに内容を発展させていきたい。

今後の課題を2点あげたい。1つはロールモデルの選び方についてである。2011年に取り上げたロールモデルは比較的高学歴で管理職のいわゆるエリートの女性が多かった。学生にとっては刺激にはなるものの、彼女たちの人生に自分を置き換えることは難しく、身近に感じられなかったことが学生の声としてあげられていた。そのため、2013年は少し身近に感じられるロールモデルも取り上げたが、学生のキャリアデザインにとってどのようなロールモデルがふさわしいのか、どのようなバラエティーを持たせるのが良いのかは今後の研究課題としたい。

2つ目はキャリアプランニングの中での生涯学習の視点である。先にも述べたが、キャリアは職業選択ではなくて生き方であり、過去、現在、未来とつながり常に変化をしていくものである。キャリアプランニングは学校教育のみで完成するものではなく、また社会の変化が大きい時代には、その時その時に応じた専門性や技術が必要となる。自分との対話を繰り返しながら、これから必要なものは、進んでみたい分野は何かを考え、そのために何を学習すべきなのかを、短大を卒業した後でも自律的に考えていけるような基盤を育成するためには何が必要であるか。これは当該科目だけで答えをだすのは難しく、本学全体として考えていくことになろうかと思うが、他科目との有機的な連携を模索しながら、考えていきたい。

(註)

- (1) 2011年版の中小企業白書(中小企業庁)によれば、長野県における常用雇用者数全体の82.6%が中小企業に雇用されている。また、小規模企業に限ってみると常用雇用者数全体の23.1%となっている。同様の数を東京都でみると35.1%が中小企業、6.3%が小規模企業に雇用となる。県外を本社とする企業の支店も多く、大企業に雇用されていても比較的小規模な事業所で働くことが多いと考えられる。
- (2) 2013年度から、共通教育科目の履修登録学生数の上限を100人としそれを超えた場合抽選を行う運営となり履修学生数が平準化され、「女性とキャリア」では履修学生数が2011年度より減少した。学科および学年ごとの人数は、2011年度の履修者合計121人の内訳は、幼児教育科1年25人、2年1人、国際コミュニケーション科1年30人、2年65人、2013年度の履修者合計45人の内訳は、幼児教育科1年1人、国際コミュニケーション科1年20人、2年24人であった。
- (3) 表-1の中に「ロールモデル研究(自由)」と示した回がこれに相当する。
- (4) 日本キャリア教育学会による2011年(平成23年度)第1回キャリア・カウンセラー養成研修講座の講義「発達支援としてのキャリア教育～夢と自立を中心として」(講師:高綱陸美)で用いたワークを参考に、本学用に一部改変して実施した。
- (5) ソニー生命株式会社によるライフプランニング授業の詳細は以下のサイトを参照のこと。
<http://www.sonylife.co.jp/volunteer/lp/index.html> (2014年4月17日アクセス)
- (6) 第一生命保険株式会社によるライフサイクルゲームⅡの詳細は以下のサイトを参照のこと。
http://www.dai-ichi-life.co.jp/tips/lc_game/ (2014年4月17日アクセス)

謝辞

本実践に参加した学生、本実践の開講に関わる本学教職員に深く感謝する。本研究の一

部は、平成24-26年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:24530981)の助成を受けた。

参考文献

- 中小企業庁, (2011), 『中小企業白書 2011版』 <http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/h23/h23/index.html> (2014年4月17日アクセス).
- 羽田野慶子, 2007, 「女性のキャリア形成に関する調査研究」『国立女性教育会館研究ジャーナル』第11号, pp.103-112.
- 国立女性教育会館, 2006, 『女性のキャリア形成支援サイト』 <http://winet.nwec.jp/career/> (2014年4月17日アクセス).
- 内閣府男女共同参画局, 2007, 『女性のライフプランニング支援に関する調査報告書』 <http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/raifupuran/pdf/raifupuran1903.pdf> (2014年4月17日アクセス).
- 日本女性学習財団(編), 2011, 『女性のキャリア形成支援ハンドブック』日本女性学習財団.
- 福沢恵子(監修)・日本能率協会マネジメントセンター(編), 2009, 『私の仕事道 トップ女性10人のジグザグキャリアから学ぶ!』日本能率協会マネジメントセンター.
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法』新曜社.
- 渡辺三枝子, 2009, 「女性のキャリア形成支援の在り方 - 「ロールモデルに関する調査研究」の結果から」『国立女性教育会館研究ジャーナル』第13号, pp.16-26.

(おさだ なおこ: 清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科准教授)

(やぶた ゆきこ: 清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科准教授)